実践報告

教職大学院での学びを活かした実践報告

― 研究授業における研究協議会変遷（ラウンドスタディー導入）の事例 ―

伊東　大介（東村山市立青葉小学校）

１．はじめに

本報告者は、２００８（平成２０）年度に東京学芸大学教職大学院（以下教職大学院）を修了し、２００９（平成２１）年４月に現任校へ異動、勤務２年目（２０１０年）に研究主任を拝命した。教職大学院を修了して現場復帰し、教職大学院で学んだことがどのように研究主任の業務に活かされ、校内研究の推進に役立ったか、その一部をこの紀要第４集の紙面をかりて記録した。

今回は、校内研究の推進の中でも、研究授業おける研究協議会の変遷ついて報告する。

２．これまでの協議会とラウンドスタディの導入

小学校の研究授業後の協議会と言えば、どんな様子を想起されるであろうか。列挙すると、話し合う形態としては、

①意見のある個人が挙手等で発言する。

②分科会や学年でバズセッションのように相談してから、そのグループから出た意見ということで発表する。代表者がまとめていう場合もあれば、意見を出した個々の教員がいう場合もある。

③（順番で）全員が発言する。

意見の集約方法としては

a. 発言のみ

b. 発言を板書する

c. 付箋に書いて印刷して共有

d. 短冊に書いて黒板に貼って共有

等が思いつく。

１０～１５年ほど前は、①＋ a、③＋ a の組み合わせが多かったが、近年、②＋ c や②＋ d 等の方法で協議を進めることが多いようである。

協議会の「シーンとした」雰囲気を打ち破って、個人が自分の意見を言うことは、なかなか難しく（本来そういうことではよくないのだが）、いろいろと模索した結果であることは間違いないであろう。様々なキャリア・ジェンダーなどの立場の混在した学校の教職員が一堂に会する研究協議会（当日は講師もいることが多い）で意見を言うことは、確かにそれなりに勇気の要ることである。また、いわゆるその職場で「声の大きい人」の意見が優先されてしまう場合、グループとして意見を集約したために、本来その人が考えたニュアンスとは異なった形の意見にまとまってしまう場合などもある。児童には「自分の意見はしっかり言おう」「理由もつけて言おうね」と指導している教員が集まった協議会の実態は、このような場合も多いのが現実である。「クリティカル」な協議とはかけ離れている場面を目の当たりにすることもある。

本校では、２０１３年度は次のような方法・手順で協議を行った。

①低学年・中学年・高学年・専科から一人ずつ、計４人のグループを作る。

②授業前に示されていた「協議の視点（授業を見る視点)」をもとに協議を行う。

③グループで出た意見を（集約はせずに）短冊に記入し、黒板に貼る。

④全体協議では、各グループからの意見を概観した上で、質疑応答しながら内容を深めていく。

⑤講師の指導講評。

※低学年・中学年・高学年はそれぞれ６名（３クラス×２学年ずつ）

専科は６名（音楽、図工、家庭、養護、算数習熟度別、時間講師）の構成。

４人グループは、年間７回の授業で毎回できる限り編成替えすることにした。学級担任１８名、専科６名、管理職２名の学校規模では、校務分掌などが異なると普段なかなか会話できない教員同士もいるため、協議会を活用して、人的な交流も活性化しようと試みたわけである。

前述の課題は、この方法によってある程度は解決された。しかし、他のグループでの話し合い内容が分からないために、全く同じ内容について話し合っていたり、あるグループではある程度解決している疑問が、他のグループでは全く手つかずというような実態もあった。

そのような課題意識をもっていた２０１４年３月下旬に参加した京都大学大学院教育学研究科教育実践コラボレーションセンター主催 E.フォーラム第９回実践交流会で、E.フォーラム会員原田三朗先生から「ラウンドスタディー」の方法を学ぶ機会を得た。「この方法はすぐにでも研究協議会に取り入れよう」と私は直感し、２０１４年度の校内研究の協議会で早速取り入れるよう、研究推進委員会に提案し、承諾を得た。導入に際し、研究推進委員から出た意見は「これまでのやり方（上記の方法）で時間が足りないので、ラウンドスタディーにするとさらに時間が足りなくなるのではないか」という意見の他は「ぜひ取り組んでみよう」という意見であった。

私は、原田先生から学んだラウンドスタディーを、本校の実態に合うように、次のように変えて実施することにした。

※原田先生提唱のラウンドスタディの方法は、本稿末尾の「参考」を参照。

２０１４年１２月１５日（月）５年生　研究協議会　round study　実施案

２０１４１２１２（水）伊東

１４：５０	校長挨拶・講師紹介	
１４：５５	研究経過・自評	
１５：０３	ラウンドスタディー　ラウンド①	１２分間（はじめの話し合い）
１５：１５	ラウンド②	１０分間（旅に出る）
１５：２５	ラウンド③	１０分間（はじめのグループで短冊記入）
１５：３５	全体協議開始	
１６：００	指導・講評	
１６：４０	副校長挨拶（謝辞）	

①４人のグループを作る。ホスト１名を決める→済
②テーマ（協議の視点）に基づいて、話し合いを行う。**１２分間**
★４人（３人）がなるべく均等に話す。１人の「独演会」ならないよう注意する。
★話したことは、テーブル上の紙にどんどん記入する（メモで構わない。あとでグループを移動したとき、このメモが役に立つ)。
③ホスト以外の３名（２名）は他のグループに移動（「旅に出る」)。
ホストは、新しく来た「旅人」にそれまでの話し合いの内容を、テーブル上のメモを元に簡単に
解説し、新しいメンバーで話し合いを続ける。**１０分間**
★この時も、メモを紙に残す。
④最初のグループに戻る。ホストは、「旅人」がどんなことを話していったか、簡単に解説する。
話し合って、テーマについての意見をまとめて短冊に記入する。**１０分間**
⑤グループ毎に、まとまった意見（短冊）を発表する。

編成　H→ホスト　　司会　○○
※メンバーに変更が必要な場合はお知らせください。

A	１○○H	３○○	４○○	専○○
B	２○○H	３○○	６○○	専○○
C	３○○H	４○○	２○○	講○○
D	４○○H	６○○	専○○	
E	６○○H	１○○	習○○	

※今回も、講師の○○先生が参加してくださるとのことで、お名前を入れておきました。
※「前回も同じメンバーだった」などありましたら、伊東までお知らせください。
※ラウンドスタディー実施の趣旨
話し合いの視点に沿って、いろいろな立場（教職経験年数、研究教科、校務分掌、担当学年など） を超えて、多様な意見が出てこそ、深まり高まるものという考えに基づいています。どんどん自分の意見を話してください。他の人の意見もよく聞いてください。**主体的に参加することがおもしろ さにつながってくると考えられます。**（これは校内研究に限った事ではありませんが)。

・基本的には、原田先生の方法を踏襲した。
・時間配分は、１２分１０分１０分としたが、実質的には約１４分約１２分約１１分ほどに落ち着いた。
・趣旨を確認するための文言を毎回入れた。

校内研究授業７回の内、６回をこのように実施した結果、年度末に職員からでた意見は次のようなものであった。

○みんなの意見を聞きながら、視点をもとに話し合え、よかったと思う。他グループの話を聞き、話し合えたのもよかったと思う。
○今年からの形態ラウンドスタディーは、皆が主体的に参加でき、かついろいろな考えを聞けるので非常に良いと思います。
○交流しやすくて良い。途中で分かれるのはいろいろな意見が出て良い。分かれることで深まりきらないもどかしさもある。
○ラウンドスタディー→より多くの意見が聞けてよかった。
○ラウンドスタディーがよかった。
○最高だと思います。
①意見を安心して出せる環境
②様々な意見を聞く機会が保障さていれる
③良い点、質問、改善点などの意見が分かりやすい（授業者にとって)。
○ラウンドスタディーでの協議会が定着してきた。
○毎回の授業で協議の視点が書かれているので話も進めやすい。
○ラウンドテーブル式・旅人式、ともに良かった。
○ラウンドスタディーは継続していきたい。情報交換できる共有の場でよかった。
○ラウンドスタディー（意見が出しやすかった)。ホスト、旅人の役割分担が良かった。

上記の意見は、
◎自分の意見を出しやすい。ほかの人の意見も聴ける。
◎意見の多様性が確保される。
◎ホストを輪番で行うなど、役割を持つことで主体的に参加できる。
と整理されよう。

また、課題として、十分な時間の確保が挙げられるが、これに関しては、なかなか難しい問題でもある。勤務時間の割り振り、講師の指導助言の時間等勘案して、それぞれの学校で着地点を見いだす必要があるかも知れない。

「途中で分かれるのはいろいろな意見が出て良い。分かれることで深まりきらないもどかしさもある。」という意見があったが、今回のラウンドスタディーは意見を収束させることが目的ではないので、この点に関してはその都度、ラウンドスタディーの目的を考えることが大事であると思った。

このように本校では、ラウンドスタディーを導入することにより、校内研究授業の協議会に見られる課題をクリアーできた部分が多かった。

３．３年間のラウンドスタディーを通して

２０１４、２０１５、２０１６年度の３年間、年間７回の研究授業の協議会は全てラウンドスタディーで行った。この２１回のラウンドスタディーを通して、研究協議会への主体的な参加が増えたことは前述の通りである。

２０１７年度を迎え、第１回の研究授業、協議会があり、その後研究推進委員から次のような意見があった。「ラウンドスタディーは良いのだが、どうも毎回の研究授業で各教員の学びが今ひとつ深まっていないような気がする」「私達は、授業の終わりに子どもた

ちに『振り返り』をさせますよね。私達自身は振り返りをしているのでしょうか？」

本校では、ラウンドスタディーを導入する際に、時間の都合上、Final　Round を省略してしまっていた。これは、致し方ないことではあったが、教員から「やはり学びには『振り返り』が大切である」という指摘がなされたということは、必要性を感じられたということの証左であるかもしれない。

そこで、研究推進委員会に次のように、振り返りを加えた協議会の時程を提案した。

１４：５０	校長挨拶	
１４：５５	研究経過・自評	
１５：０５	**ラウンドスタディー**	**ラウンド①　２０分間（話し合い・短冊記入）**
１５：２５		**全体協議　　今までと同様です。**
１５：５０		**指導講評**
１６：３０		**ファイナルラウンド　１０分間（振り返り・発表）**
１６：４０		副校長謝辞・閉会

ファイナルラウンド　　振り返り

各グループで「今日の授業、協議から学んだこと・考えたこと」等について、話し合って下さい。意見をまとめる必要は全くありません。それぞれが何を学んだかを交流してもらえばよいです。異なる意見があって当然です（自分と異なる意見は、宝の山です）。それを交流することに意義があります。どうぞ議論して下さい。

発表

各グループが、ファイナルラウンドで話し合ったことを発表して下さい。方法はお任せします。代表を決めても良いですし、一人ひとりでも構いません。また、書いた模造紙（裏紙）を使っても良いですし、新たに紙に書きたい場合は、準備しておきますのでどうぞご自由にお使い下さい。

上記の方法は、振り返りを入れたが、その分、ラウンドスタディーの要である「席の移動（旅に出る）」を省くことにもなってしまった。これも、時間の都合上、どちらかを選択せざるを得ない。

そのような状況の中で、講師を招聘しないで行う研究授業を設定することになった。その日は、次のように時程を組んだ。

１４：５０	校長挨拶	
１４：５５	研究経過・自評	
１５：０３	ラウンドスタディー	ラウンド①　１２分間（はじめの話し合い）
１５：１５		ラウンド②　１０分間（旅に出る）
１５：２５		ラウンド③　１０分間（はじめのグループで短冊記入）

１５：３５	全体協議　　今までと同様です。
１６：１０	**ファイナルラウンド　２０分間（はじめのグループ）**

各グループで「今日の授業、協議から学んだこと・考えたこと」等について、話し合って下さい。意見をまとめる必要は全くありません。それぞれが何を学んだかを交流してもらえばよいです。異なる意見があって当然です（自分と異なる意見は、宝の山です）。それを交流することに意義があります。どうぞ議論して下さい。

１６：３０	各グループ発表（その場でいいです）

各グループが、ファイナルラウンドで話し合ったことを発表して下さい。方法はお任せします。代表を決めても良いですし、一人ひとりでも構いません。また、書いた模造紙（裏紙）を使っても良いですし、新たに紙に書きたい場合は、準備しておきますのでどうぞご自由にお使い下さい。

１６：４５　閉会

この場合、席替えと振り返りの時間を確保できた。

振り返りの関して本校の教師は、今回の報告にまとめるほどのデータは集積されていないが、振り返ることによる学びの内容の明確化、進化があるという意見が多く聞かれる。これは、次回詳しく報告したい。

講師の「指導・助言」がある場合、時程をどう組むか、今後の課題である。

この講師の指導・助言に関して、原田（２０１７）は次のような指摘をしている。

「私たちは、とかく、一つの答えを求めがちです。例えば、ここで道徳のオーソリティがこうするとよいということを伝えれば『ああそうなんだ』と納得することも多いと思います。私たちはそうした学び方にあまりに慣れてしまっているのではないでしょうか。広い視野から指摘をいただくことも大切ですが、その一方で、子どもたちを目の前にして、見たことや感じたことから経験や子ども観を交流し授業観を磨き合うことで、明日への授業へとつなげていくことも同じように大切なことです。答えは出ないのかもしれません。しかし、それでよいのです。ここに挙げた「発問」に対する考え方のズレという問題についても､置かれた状況や子どもの様子､授業の展開によって発問はいくらでも姿を変えます。」

また、佐藤（２０１２）は、「講師」ではなく「スーパーバイザー」という表現で次のように述べている。「授業改革を支援することも、学校改革を支援することも、決して容易なことではない。これまで２５００校以上の学校と協同してきた私にとっても、毎回が新しい問題と新しい状況との遭遇であり、新しい創意を必要とされる難事業だが、少しでも経験豊富なスーパーバイザーと協同することなくしては、この難事業を学校が実現することは不可能である。ぜひ、信頼できるスーパーバイザーとの協同関係を築いてほしい。優れたスーパーバイザーは、授業改革と学校改革を助言し指導する人ではなく、その学校の校長や教師と共に学び合うことのできる人である。」

その研究授業一回こっきりの「指導助言」ではなく「共に学び合うことのできる人」という指摘は重要といえよう。

研究協議会のスタイルの変化については、日本教師教育学会編（２０１７）教師教育研究ハンドブック　ｐ３５８～３５９にこのような記述がある。「校内研修の改革として、今日、最もポピュラーになっているのは、授業研究会におけるワークショップの採用である。学校や地域にもよるが、これまで、授業研究会が「集団的学習とその応用」の機会とないケースが散見された。すなわち、研究授業を実施した後の協議会において、授業に関する意見が積極的に示されない、表面的・形式的なコメントに終始する、発言者が偏るといった状況に陥っている学校が少なからず存在した。そうした状況を打開するために、研究授業後の協議会のプログラムに、さまざまな能動的な活動を組み入れる取り組みが学校現場に浸透しつつある。」まさに、本校はこの渦中である。

今後、この取り組みを継続し、発展させる工夫が課題となる。

４．むすびに

大学院修了後９年目を迎え、学んだ成果の還元が少しずつやっとできてきたと実感できるようになった。**成果の還元は、一朝一夕にできるものでもなく、数値化できるものだけでもなく､修了者のライフステージに合わせてなされていくものだと考えるようになった。**担任として還元できること、研究主任として還元できること、教務主任として還元できること、副校長・校長として還元できること、行政系から還元できること……それぞれである。

今回は、自分の校内研究担当者としての業務を振り返った。今回、校内研究の協議会に導入したラウンドスタディーは､教職大学院在学中ではなく､その後に学んだものである。その学びは､教職大学院在学中にきっかけがあった。教職大学院は､在学中だけではなく､修了後のいろいろな形での学びの継続が可能であることの一例をご紹介できれば幸いである。

ラウンドスタディーの取り組みが４年目を迎えたが、今年度は職員の中から「自分たちで集まって授業や学級経営について話したり勉強する場があったらよくないですか？」という声があり、勤務時間外に「学びカフェ」が始まった。この取り組みについては、ラウンドスタディー導入の経過と併せて次回ご報告できたらと考えている。

参考資料

原田三朗、石井英真、黒田真由美（２０１５）探究を続ける教師集団へ　ラウンドスタディーの手引き～協同の知を求める参加型研修の提案～(科学研究費補助金リーフレット)

石井英真、原田三朗、黒田真由美（２０１７）Round Study 教師の学びをアクティブにする授業研究－授業力を磨く！アクティブ・ラーニング研修法　東洋館出版社

佐藤学（２０１２）学校を改革する－学びの共同体の構想と実践　岩波ブックレット８４２　岩波書店

日本教師教育学会編（２０１７）教師教育研究ハンドブック　学文社

■ 写真:校内でのラウンドスタディーの様子

⇒ 協議の視点を意識できるように、記録用紙の真ん中に視点を貼っておく。

■ 参考：石井ほか（2017）より）

Round Studyの進め方 <事例:授業研究会事後研におけるRound Study>

準備

- ●4人グループの座形　●模造紙(グループ数)　●マジック(グループ数)
- ●模造紙の中央に「授業の魅力と課題」と書いておきます。
- ●まとめ用の短冊(各グループ水色2枚・黄色2枚ずつ)

展開

- ●ホストによる打ち合わせ
- ○グループには、1名ずつ、ホストがいます。ホストは席を移動しません。
- ○ホストは、担当したグループメンバーのおもてなしの役割をします。
  グループを訪れた人が心地よく過ごすことができるように気を配ります。
  若い人でも構いません。会が始まる時に、おのおのが席に座ることになると思いますが、
  その時に、さりげなくみなさんに話題を振ったりして、場の雰囲気を和らげるような仕事をします。
- ○全員に発言の場があるように心配りをします。
- ○「かきながら」話すことをうながします。

Round 0 15分 参加者全員
- □ 本研修の目的(明らかにしていきたいこと)の提示
- □ 「Round Study」についての説明
- □ アイスブレーキング(参加者の多くが初対面の場合)

Round 1 12分 グループ
- □ テーマについて、各々が自分の考えを伝えます。
- □ 「かきながら」が話すことに心掛けましょう。
- □ リラックスして話します。考えを比べたり、つなげたりします。

Round 2 12分 グループ
- □ ホストを残して、席を移動します。
- □ ホストは、訪れた人にRound1の様子を模造紙を見ながら簡単に伝えます。
- □ 模造紙にかき加えながら語り合います。

Round 3 12分 グループ
- □ Round1のときの席にもどります。
- □ テーマについて、グループとしての意見を短冊にまとめます。
- □ 例えば、テーマが「本時の授業の魅力と課題」であれば、魅力を2つ黄色の短冊に、課題を2つ青色の短冊にかきます。

Final Round 20分 参加者全員
- □ グループ発表(各グループ90秒)
- □ 示された短冊の整理・カテゴライズ
- □ 全体討議

Round E 5分 後日 参加者全員
- □ 「パフォーマンス評価」「自由記述」を用いて、Roundの振り返りをします。
- □ 評価シート・討議の内容等から、Roundの成果をニュースペーパーにまとめ、後日、参加者に伝えます。
- □ 評価・分析から、次のRound Studyのテーマを設定します。